



7月4日から降り始めた京都の雨は七夕の昨日まで丸4日降り続けました。地球研付近も断続的に強い雨が襲い、構内道路脇の斜面で土砂崩れが起きました。今回の豪雨は、京都を含め、九州、広島、岡山、高知、愛媛など広く西日本各地域に、50年に一度以下という極めて激しい豪雨の予測をもとにした「大雨特別警報」が気象庁から出され、実際に、大きな被害が出ていることも、メディアで報道されている通りです。気象庁報告によると、これらの地域の多くの観測地点で、7月に入ってからのわずか3~4日間で平年の7月降水量の2~3倍に達する記録的な豪雨になっています。

旧暦の五月は、現在の6月中頃から7月中頃に対応するため、五月雨（さみだれ）とはまさに現在の梅雨に対応します。五月雨の季節は、古来から多様な季節の変化を楽しんできた日本人にとって、稲作にとって恵みの雨をもたらす季節であると同時に、時に大雨による災害に見舞われる厳しい季節でもありました。

<さみだれを集めて早し最上川 松尾芭蕉>

<五月雨や大河を前に家二軒 与謝蕪村>

<さみだれや名もなき川のおそろしき 与謝蕪村>

江戸時代を代表する芭蕉や蕪村によるこれらの俳句は、梅雨に伴う大雨とそれによって荒れ狂う河川の増水や洪水が、当時の日本列島のどこにおいても、人々にいかに恐れられていたかを強く感じさせます。

梅雨の大雨による災害は、近年急激に大きくなっています。その原因のひとつは、河川の増水や土砂崩れを起こしやすい集中豪雨が気候変化に伴って増加していることです。図1は、過去42年間における全国での1時間降水量50mm以上の年間発生数ですが、最近10年間(2008~2017年)の平均年間発生回数(約238回)は、統計期間の最初の10年間(1976~1985年)の平均年間発生回数(約174回)と比べて約1.4倍に増加しています。この降雨統計のかなりの部分が梅雨期の降水量に拠っています。「バケツをひっくり返したような豪雨」は、経験的にほぼ1時間30mm以上に対応しますので、50mm以上がどんなに強い雨か想像できますね。「地球温暖化」によって大気の水蒸気量が増加していることが、大気を不安定にしやすくし、豪雨頻度を増やしている可能性が、最近の多くの研究で指摘されています(安成、2018)。

災害が増えているもうひとつの原因は、「近代化」に伴う都市の拡大などによる人間の生活圏の変化です。多くの河川は堤防で固められ、そのすぐ近くまで住宅が密集して建てられています。都市化の拡大により、住宅地は平地から周辺の山の斜面にも広げられています。

堤防も斜面もかなりの大雨に耐えられるように設計はされており、人々はふだん自然の猛威を忘れて「安心して」暮らしています。しかし、今回のように、50年に一度あるかないかという豪雨で、一たび限度を超えてしまうと、堤防は決壊し、斜面の崩壊が起こってしまいます。今回の被害も、ほとんどが堤防の決壊による洪水・冠水か土砂崩れかのどちらかです。

かつては、大雨による河川の氾濫は、自然堤防の外に遊水地を作ることにより防いでいました。京都の桂川、鴨川、宇治川、木津川などの河川が合流する地域には、図2に示すように、かつて「巨椋（おぐら）池」という大きな遊水地があり、洪水の受け皿になっていました。

＜五月雨や美豆（みず）の寝覚めの小家がち 与謝蕪村＞

この句は、巨椋池に近い美豆（みず）村の小さな家に住んでいた農民が、梅雨の大雨時に巨椋池が増水して、自分の田畑や家に影響しないかヒヤヒヤして夜もよく寝られない気持ちを詠んだものです。図2の巨椋池西側の宇治川と木津川の合流点近くに美豆村とあるのがこの村のようです。先にのべた「大河の前に家二軒」と同様、ヒヤヒヤしながらも五月雨の恵みと脅威を共に受け入れようとしている農民への共感と同情が詠われているようです。

蕪村はさらに、以下のような梅雨期の句も詠んでいます。

＜さみだれの大井越したるかしこさよ 与謝蕪村＞

静岡の大井川は東海道五十三次の街道の途中、橋がなく徒渉せねばならない最大の難所であり、特に五月雨の増水時の徒渉は、命がけの大変緊張する大仕事でした。たぶん何日も水が引くのを待ったあとだろうか、何とか運よく徒渉をやりおおせたという安ど感を詠った句であり、「やれやれホッとした、ありがたい」という気持ちが「かしこさ」ということばに込められています。

私たちにはもはや蕪村の時代に戻ることはできません。ただ、当時の人々が自然の脅威と向き合う、あるいは付き合う時に持っていたある種の「緊張感」を、近代社会の中でも残すことは、人と自然が調和した持続可能な社会づくりにとって大切ではないか。今回の西日本豪雨を体験する中で、そんなことを感じていました。

参考文献：

与謝蕪村「蕪村句集」（玉城司 訳注） 角川ソフィア文庫（2011）

安成哲三 地球気候学。 東京大学出版会（2018）

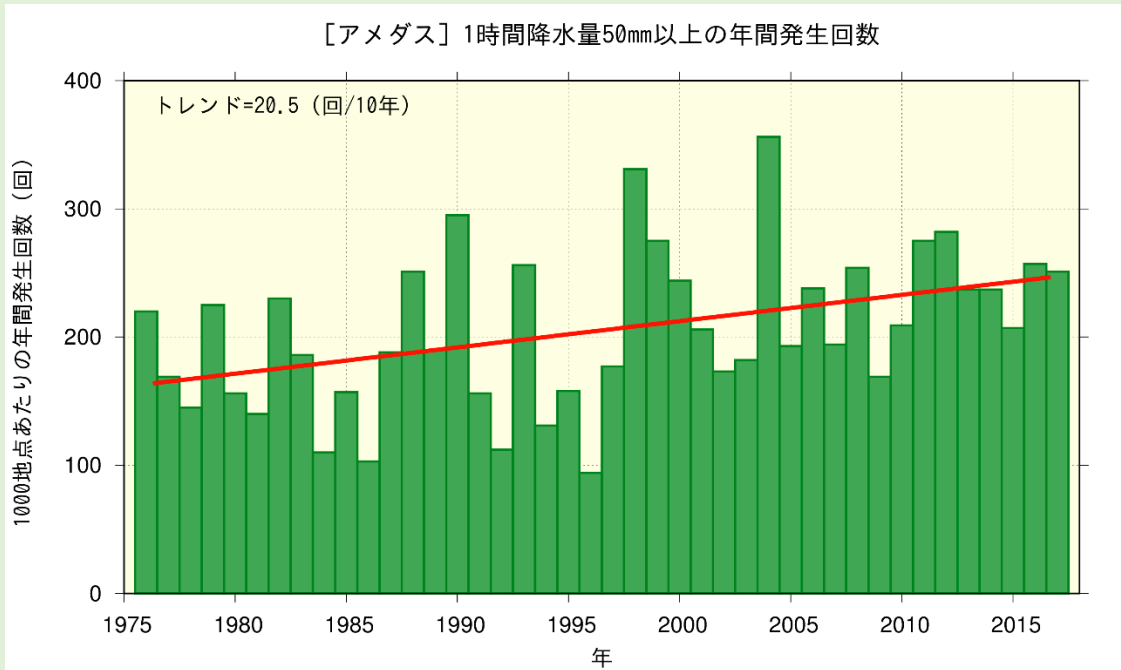


図1 全国の1時間降水量50mm以上の年間発生回数の経年変化(1976~2017年)
 棒グラフ(緑)は各年の年間発生回数を示す(全国のアメダスによる観測値を1000地点あたりに換算した値)。直線(赤)は長期変化傾向(この期間の平均的な変化傾向)を示す。
 (気象庁HPより)

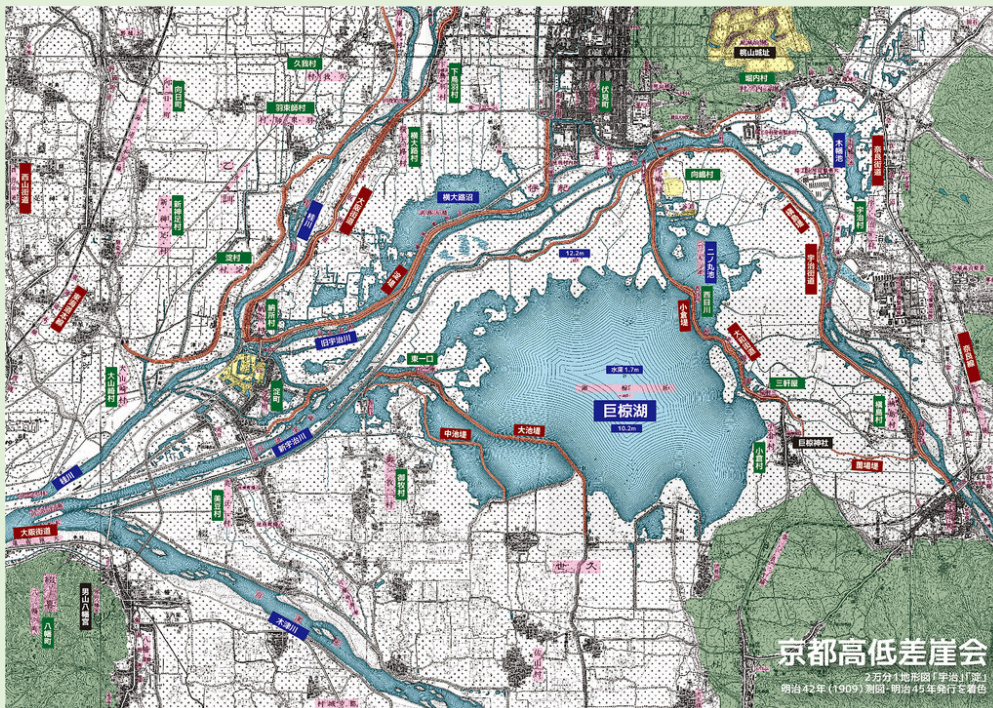


図2 明治42年(1909年)測図、明治45年発行の地図に示された京都府南部の巨椋池(湖)。
 「京都高低差崖会」のHPより引用。 <http://kyotokoteisa.hatenablog.jp/>